

ずいそう

団塊の晴耕雨読への挑戦

杉岡博史



この2月、遂に還暦を迎えることになった。何か書けという。探してみると、人さまに自慢、紹介できるものが、一つだけあった。

話は今から13年前の平成7年、旧北海道開発庁北海道開発局官房機械課に配属になったときから始まる。職場の酒席を重ねるうち、話題はあっちこっち飛びつつも、将来の理想の生活形態の話になった。言い古された晴耕雨読が理想との結論。50歳前のことである。しかし、団塊世代は人数が多い、誰もが考えるだろうから、その時は競争が激しくなる。準備は60歳からでは遅すぎる。今から準備すべし、ということになり、家内と相談。あっさりGOサインがでた。しかし、そんな簡単には希望にかなった土地は手に入らない。国土法抵触、登記障害騒動など紆余曲折を経て、自宅のある札幌から車で1時間半ほど離れた丘陵地帯に、ようやく土地を手に入れることが出来た。晴耕雨読プロジェクトが動き出して3年後の平成10年のことである。

土地は手に入ったものの、当方、函館に単身赴任の身となっており、雑草を刈り取りるくらいで手持ち無沙汰。何も出来ない。ある時、周辺を探索すると、近所に、とど松林を伐開し山積み放置したものが、二山あるではないか。みれば径が最大25cm程度のものから、足場丸太くらいのもので、雑多に積まれ100本位はある。一山1万、しめて2万円だという。単身だけに、想像・空想する時間だけはたくさんあった。函館の美味しい産物をモリモリ食べ、体力も余っていた。丸太の山、丘陵地、背景が林、前面は大草原となれば、ここは丸太小屋作りしかない。しかも、何から何まで手作りの丸太小屋。もう気分はカナダかロッキー山脈の山の中。大草原の小さな家だ。頭の中は男のロマンで溢れ出し状態となった。つい大言壮語。周囲に、俺はログビルダーになると宣言。これでも技術屋の端くれ、単なる言いつ放しでは終わらせられない。丸太購入後、施工計画を綿密に立てはじめた。チェーンソーは扱ったことが無い。ログビルダーに欠かせないスクライバーとは何者だ。丸太組みの原理は？晴れの日も雨の日もログハウス解説本を読んだ。

丸太準備、基礎、ログ積み上げ、屋根、板金工事、内装工事、電気工事。土木と違って建築は多種多様の工種がある。最大の難問は、家内と二人で動かせる丸太の長さはいくらかという極めて素朴なものであった。ここはロッキーの山の中、全て人力でやらねばならぬ。2週間に一度くらいしか使わないユニックを手配するのは非現実的。100kg程度が取り扱いの限界とみて、丸太元口径が25cm程度であることから丸太部材長は4.2m、高所の5mを超える棟木は、チェーンブロックで吊り上げることにした。やれるとの見通しがつき工事着手したものの、素人ログビルダー一人、女軽作業員一人では遅々として進まず、6年もの歳月を経てようやく概成、内装工事、電気工事を残した今の出来高状態までたどり着いた。やっとたどり着いた。本年、平成20年、めでたく全工事完成予定である。当初予定から3年も遅れて8年もかかることになる。

一番辛い仕事は、皮むきであった。100本の丸太の皮むきは果てしない作業であった。さらに辛いことは加工組み上げが遅い為、苦勞して皮むきした丸太が腐食して、次第に使い物にならなくなっていくことであった。あの辛い労働の結実が毎年蝕まれて無駄になっていく。ログキット購入者にはわからない苦しみである。思い立ってから13年、最初の3年は土地が手に入るかどうか精神的にヤキモキさせられた。のちの10年は、肉体的に損耗した。50過ぎての筋肉強化はありえない。今も毎週土日は労働の日々に明け暮れ、ヘトヘトになり自宅に帰っている。男のロマンと引き換えに腰も痛んだ。

「朝な夕なにお茶をすすりながら、ゆっくり景色を眺め、やおら農作業をしては手を休め、雨の日は読書をしつつ居眠りをする」13年経っても、そんな生活はまだ来ない。

朝な夕なに消炎剤をすりこみながら、今日も急ぎ足で、わき目も振らず会社に通っている。雨の日も…。
「青い鳥 追い求めたら 籠の鳥」 合掌。